

Festa di Nozze,Fantasia in 3 Tempi

Giuseppe Manente

Riduz.J.Nakano

幻想曲「華燭の祭典」

ジュゼッペ・マネンテ作曲

中野二郎編曲

作者は正規の音楽教育を終えてから、直ちに歩兵第60連隊軍楽長となり、以後各地の軍楽長を歴任した。

本曲は彼が1903年に歩兵第3連隊軍楽長となり、「降誕祭の夜」、「国境なし」等を作曲した後の作曲意欲最も旺盛な37才頃の作品である。

本曲はイタリアの著名な作曲家ホルツォーニ、テュエク、ウォルフ・フェラーリの賞讃を得た。

マントーリン合奏曲として本邦に親しまれている「秋の夕暮」、「メリアの平原にて」はこの数年後に書かれたもので、この時代には吹奏楽の力作が多い。

本曲は1966年6月、同志社大学マンドリンクラフが初演して以来、マンドリン曲の名曲として本邦に定着してしまった。

我々はこの曲にいままでの曲になかった新しい魅力を見出したのであろう。

それは何よりも聞くもの、奏くものを楽しませるおもしろさ、いわゆる演奏効果の大きさが我々をひきつけるからである。

第一楽章 人々の祝福(Allegro conbrío)

最初の不完全小節の一音、それに続くリズムカルなシンコペーション。

第一楽章の魅力はこの一小節に凝集して圧倒的に我々を打つ。

第二楽章 教会にて(Andante Religioso)

静かに重々しく曲は始まる。つづいてマンドローネの低音の上にマンドラの二重奏が8小節にわたって奏され、徐々に気分が盛り上がる。

そしてついには宗教的感動にまで達する。

華燭の典も最高潮である。

第三楽章 家族の祝宴(Allegro Festoso)

一転して軽快なメロディーが流れる。

そこには家族の喜びがあふれている。

この三楽章は曲想テンポともめまぐるしく変わり、テクニックも高度なものが要求される楽章である。

興奮の頂点は第一楽章の主題の再現となってあらわれ、曲は最後のヴィヴァーチシモで堂々と終る。(解

説/中野二郎)

追加資料

遺稿

中野二郎編著

「マンドリン ロマンの薫り 2集」より